

領域「人間関係」における授業のあり方についての一考察

One about the ideal way of class in the area "human relations" Consideration

細 川 隆 史 ・ 後 藤 紀 子

幼稚園教育課程・領域「人間関係」・関係発達

1. はじめに

中央教育審議会は、2016（平成28）年12月の総会にて、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）平成28年12月」を取りまとめた（以下、「中央教育審議会答申」）。この答申を受け2017（平成29）年3月に幼稚園教育要領が公示され改訂がなされた。この改訂で、幼稚園教育要領（以下「要領」）、保育所保育指針（以下「指針」）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下「保育要領」）の3法令が同時に改訂（定）され、いずれの要領・指針を扱う幼児教育施設における保育内容については、3歳以上児の保育内容の整合性が図られた。

また、小学校以上の学習指導要領も同時に改訂がなされた。未来に待ち受ける様々な変化を予測することが困難な時代を生きていくこととなる子どもたちには、将来に向けて、自らの人生をどのように拓いていくかが求められることになる。子どもたちが、一生涯を生き抜く力を培っていくことが今後の教育で問われる中、日本の教育機関は何を整える必要があるのかが、教育者等の関心どころとなる。

本改訂（定）の目玉は、「社会に開かれた教育課程」である。予測不能な未来の変化を見据えながら、子どもたちの力を育てていくため、新しくなった教育課程では、学校教育での育成を目指す資質・能力を「3つの柱」として明確にした。「3つの柱」とは、幼児教育から高等学校教育までの発達段階を通じて、体系的に育んでいくことを期待して作られたものである。

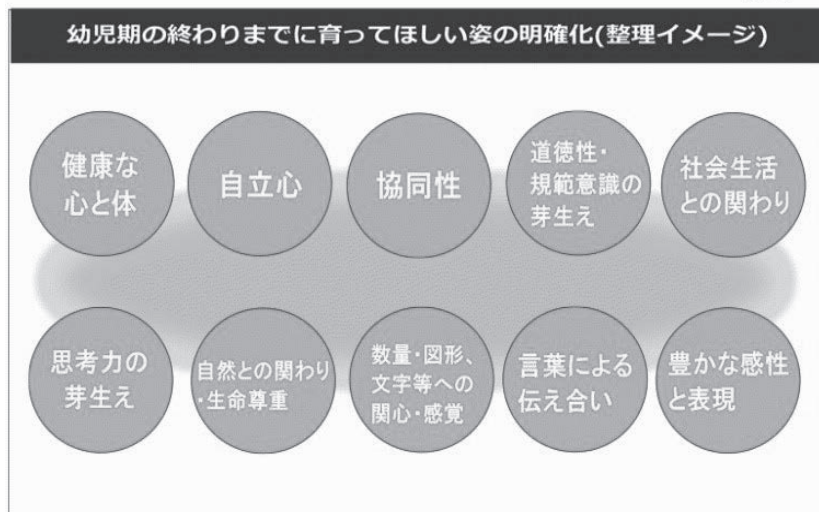
幼児教育分野では、①知識及び技能の基礎 ②思考力・判断力・表現力等の基礎 ③学びに向かう力、人間性等の基礎を3本柱にして明示し、「3つの柱」を相互に関連し、遊びを通して総合的に育むものであると、新しい目標がたった。

2018（平成30）年改訂版の要領では、「育みたい資質・能力の明確化（3つの柱）」の他に、「小学校教育との円滑な接続」及び「現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し」の、合わせて3つの基本的方針が示された。

改訂の注目したい点の一つは、幼稚園教育と小学校教育が滑らかに接続することを実現するため「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下「10の姿」）（図1）が表記されたことである。

保育者養成での学びも大きく変わり、2015（平成27）年12月の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」を受け、2016（平成28）年11月に教育職員免許法が一部改正した。更に、2017（平成29）年11月には、教育職員免許法施行規則の改正がなされた。この改正により幼稚園教諭養成課

(図1)



引用：中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会
幼児教育部会（第10回）配付資料（H28.10.31）

程においては、要領が改訂された内容を踏まえての授業内容を見直されることとなった。2019（平成31）年4月に改正された教育職員免許法及び同法施行規則の施行に伴って、20年ぶりに各教員養成校の教職課程の履修内容が変更され、実施が始まっている。

現在の幼稚園教諭養成課程に目を向けると、基礎資格の中に「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が設けられ、「イ 領域に関する専門的事項」と「ロ 保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」で構成する保育内容の学びの充実が求められたことで、養成課程の中に複数の保育内容を学ぶ科目が含まれることとなった。「ロ 保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」については、これまでの幼稚園教諭養成課程において「教職に関する科目」の「教育課程及び指導法に関する科目」の中に位置づけられていたものであるため、「イ 領域に関する専門的事項」については、小学校の「教科に関する科目」に替わる新設科目である。

改訂が意味するものを捉える際、幼稚園教諭養成課程においては、幼児教育で大切にしていきたい保育内容に対する理解を深めることに重きをおく必要が出てきたと考えられる。

本学でも、2021（令和3）年度までは、「教科に関する科目」で代替しているところを、今後「領域に関する専門的事項」の新設を行い幼稚園教諭養成課程の一層の充実をはかろうとまさに今、準備の最中である。2022（令和4）年度末までが科目の経過措置期間であり、これまでの教職課程を見直し、養成校としての創意と工夫に加え、各校に裁量を持たせ質の高い教員を養成する科目を開設することが大きな課題となる。では、教職課程を具体的に編成し、どのような学びの場を提供するかを検討する必要があるのか。保育内容の指導法に関する研究が複数あるものの「領域に関する専門的事項」にて取り扱う授業内容についての検討を行った研究はほとんどなく本研究の着手を始めた。

本学も、神長（2017）が述べている「5領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的

には、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等の実践力」を目指す点から、保育教諭養成課程研究会（2017）の示した「領域に関する専門的事項」の「人間関係」のモデルカリキュラムを対照させ、幼稚園教職課の科目として位置づけられた「領域に関する専門的事項」にて扱う内容を検討し、領域「人間関係」における「領域に関する専門的事項」の授業の内容を明確にしたい。本学の幼稚園教諭養成課程における「領域に関する専門的事項」の領域「人間関係」にスポットを当て、本学における一授業のあり方を探るのが本論の目的である。

また、前述した「10の姿」には、幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」が記されているが、「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」の4点が領域「人間関係」に関連している。

本稿は、これまで現行の小学校教科科目との共通履修を認められてきた幼稚園教諭養成課程の科目であったところを、「領域に関する専門的事項」を新設し、「5つの領域」や「10の姿」を丁寧に学んでいくことの意味や、継続して開講される「保育内容の指導法」の科目との教授法の違いを明確にし、学生らが本学を卒業後に、保育者としての資質・能力育成の強化を目指すために、新設科目開講時にどう対応するかを考える基礎的研究としたい。

2. 幼稚園教育要領 保育内容領域「人間関係」の変遷

幼稚園教諭の教職課程の必修科目「保育内容領域（人間関係）」を立ち上げるには、まず領域「人間関係」の変遷をたどることから始めたい。

1989（平成元）年に改訂された幼稚園教育要領にて、教育内容の領域の区分が5つとなった際に、初めて「人間関係」という領域が示された。「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画制作」の6つの領域から、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つの領域となった。1998（平成10）年12月の3度目の改訂、2008（平成20）年3月に4度目の改訂でも、要領の5領域としての扱いは継続されている。現行版にも掲載が至っている意味として、5つの「領域」に分類整理された幼児教育の保育内容が定着したと考えられる。

ここで、1989（平成元）年から2017（平成29）年版に示された領域「人間関係」に示される内容を年代ごとに並べてみる（表1）。上記の変遷を捉えるために示した各表は、領域「人間関係」が書かれる要領の改訂ごとの表記であり、下線を引いて示した箇所が変更した点となっている箇所である。

文部省（現文部科学省）は昭和31年に「保育要領」を改訂し、新たに「幼稚園教育要領」の作成を行い告示した。当時の要領の内容は、「幼稚園教育の目標」「幼稚園教育の内容」「指導計画の作成とその運営」の3章で構成されていた。この時の要領は、「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」の6領域で保育内容を示し、領域ごとに「幼児の発達上の特徴」「望ましい経験」で文章がまとめられており、「領域」及び「指導計画」には小学校の教育とをまとめてみる意図があった。そのため、要領に書かれている領域が「小学校の科目のようだ」と考える現場からの意見が出たという。昭和39年の改訂では、この点を踏まえ、領域ごとに「ねらい」を示して、幼稚園は「小学校への準備をする時期」であるとの考えを出そうとねらった。平成元年には、時代の変

(表1) 年代ごとにとまとめた幼稚園教育要領 保育内容領域「人間関係」

1989(平成元)年版 幼稚園教育要領	1998(平成10)年版 幼稚園教育要領	2008(平成20)年版 幼稚園教育要領	2017(平成29)年版 幼稚園教育要領
領域「人間関係」 (他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかわる力を養う。)	領域「人間関係」 (他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかわる力を養う。)	領域「人間関係」 (他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかわる力を養う。)	領域「人間関係」 (他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかわる力を養う。)
1 おらい (1)幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。 (2)身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。 (3)社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。	1 おらい (1)幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。 (2)身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感をもつ。 (3)社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。	1 おらい (1)幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。 (2)身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感をもつ。 (3)社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。	1 おらい (1)幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。 (2)身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。 (3)社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。
2 内容 (1)先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。 (2)自分で考え、自分で行動することの楽しさを味わう。 (3)友達と積極的な関わりがもたらす喜びや、思いみを共感し合う。 (4)友達の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 (5)友達のよきよきに基づき、一緒に活動する楽しさを味わう。 (6)友達と一緒に目標をやり遂げようとする気持ちをもち、思いいことや悪いことがあることに気付く、考えながら行動すること。 (7)友達の道具や用具を大切にし、みんなで使う。 (8)友達の楽しそうに生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。 (9)友達の楽しそうに生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。 (10)自分の生活に関係の深いいろいろな人に関心をもち、いろいろな人に関心をもち。	2 内容 (1)先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。 (2)自分で考え、自分で行動することの楽しさを味わう。 (3)友達と積極的な関わりがもたらす喜びや、思いみを共感し合う。 (4)友達の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 (5)友達のよきよきに基づき、一緒に活動する楽しさを味わう。 (6)友達と一緒に目標をやり遂げようとする気持ちをもち、思いいことや悪いことがあることに気付く、考えながら行動すること。 (7)友達の道具や用具を大切にし、みんなで使う。 (8)友達の楽しそうに生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。 (9)友達の楽しそうに生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。 (10)自分の生活に関係の深いいろいろな人に関心をもち、いろいろな人に関心をもち。	2 内容 (1)先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。 (2)自分で考え、自分で行動することの楽しさを味わう。 (3)友達と積極的な関わりがもたらす喜びや、思いみを共感し合う。 (4)友達の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 (5)友達のよきよきに基づき、一緒に活動する楽しさを味わう。 (6)友達と一緒に目標をやり遂げようとする気持ちをもち、思いいことや悪いことがあることに気付く、考えながら行動すること。 (7)友達の道具や用具を大切にし、みんなで使う。 (8)友達の楽しそうに生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。 (9)友達の楽しそうに生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。 (10)自分の生活に関係の深いいろいろな人に関心をもち、いろいろな人に関心をもち。	2 内容 (1)先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。 (2)自分で考え、自分で行動することの楽しさを味わう。 (3)友達と積極的な関わりがもたらす喜びや、思いみを共感し合う。 (4)友達の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 (5)友達のよきよきに基づき、一緒に活動する楽しさを味わう。 (6)友達と一緒に目標をやり遂げようとする気持ちをもち、思いいことや悪いことがあることに気付く、考えながら行動すること。 (7)友達の道具や用具を大切にし、みんなで使う。 (8)友達の楽しそうに生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。 (9)友達の楽しそうに生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。 (10)自分の生活に関係の深いいろいろな人に関心をもち、いろいろな人に関心をもち。
3 指導事項 上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。 (1)教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人とかかわる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働きかけることにより多様な感情を体験し、実行困難しながら自分の力でやることのできるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。 (2)集団生活の中で十分に他の幼児や身近な人々と触れ合い自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ共感し合う体験を通して、人と人とかかわることの楽しさや大切さを味わうことができるようにすること。また、生活を通して親の愛情に気付く、親を大切にするようにすること。 (3)友達と楽しく生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。	3 内容の取扱い 上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。 (1)教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人とかかわる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働きかけることにより多様な感情を体験し、実行困難しながら自分の力でやることのできるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。 (2)集団生活の中で十分に他の幼児や身近な人々と触れ合い自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ共感し合う体験を通して、人と人とかかわることの楽しさや大切さを味わうことができるようにすること。また、生活を通して親の愛情に気付く、親を大切にするようにすること。 (3)友達と楽しく生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。	3 内容の取扱い 上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。 (1)教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人とかかわる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働きかけることにより多様な感情を体験し、実行困難しながら自分の力でやることのできるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。 (2)集団生活の中で十分に他の幼児や身近な人々と触れ合い自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ共感し合う体験を通して、人と人とかかわることの楽しさや大切さを味わうことができるようにすること。また、生活を通して親の愛情に気付く、親を大切にするようにすること。 (3)友達と楽しく生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。	3 内容の取扱い 上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。 (1)教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人とかかわる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働きかけることにより多様な感情を体験し、実行困難しながら自分の力でやることのできるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。 (2)集団生活の中で十分に他の幼児や身近な人々と触れ合い自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ共感し合う体験を通して、人と人とかかわることの楽しさや大切さを味わうことができるようにすること。また、生活を通して親の愛情に気付く、親を大切にするようにすること。 (3)友達と楽しく生活する中でできまじりの大切に気付く、守ろうとする。

化に対応すべく、新しい要領が告示施行された。これまでの、6領域を「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域に編成し、「領域」は発達をみる視点であることを示した。

幼稚園教育は「環境を通して行うものである」ことの重要性をしっかりと認識できるようにし、幼稚園教育の基本は「幼児期にふさわしい生活を」「一人一人の特性に応じて発達の課題に即した指導」「自発活動としての遊びを保育の中心におく」ことを示した。この改訂の際には、「指導」という言葉が頻繁に使われていたものを「援助」へと表記が変わり、「子どもの主体性を重視する」と保育者の子どもへの接し方が変わったことは、現場保育者の間で戸惑いがあったことが、当時幼児教育に携わっていた後藤の心に残っている。

この様に時代とともに、子どもたちへの関わりが異なっていく保育のあり方を理解していくには、領域の変遷にも注目し、「今の子どもを取り巻く人間関係」を概観し、友だちとの人間関係の重要性を理解していく必要があると受け止めた。「人間関係」は、人との関わりに関する領域についてまとめてあり、子どもたちが周りの人と関わって生きていくための力を養うことが示してあることに加え、これまでの要領の改訂部分に注目すると、信頼感をもつ、協同意識、規範意識を育むことを重視することが追記されている。現行版ではさらに「自分の良さや特徴に気づき」と、自己肯定感についての内容が加わっている。

OECD（経済協力開発機構）は、これからの時代を生きていく子どもたちに必要となる力の一つに、「異なる他者と協働する力」を挙げている。これは、領域「人間関係」に深く関わっていると見える。子どもたちが他者との関係の中で健全に自分自身を育み、他者と協働しつつ、生きていくことができるよう保育者は子どもの成長に寄り添うことが求められることを示した領域「人間関係」のねらい及び内容について、確実に理解できる授業が必要となる。つまりは、授業内では、子どもを取り巻く現代社会の人間関係に関心が持てるような授業展開が必要となる。

3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と領域「人間関係」

要領、指針・保育要領の2017年の同時改訂（定）に伴い2018年4月より新しく施行がなされたことは冒頭でも述べた通りであるが、「10の姿」（図1）は、小学校入学前までに養いたい姿を具体的な視点から捉えた内容である。

2017年3月に改訂された要領や指針に示された「10の姿」の内、領域「人間関係」に関連するのは、「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活と関わり」の4項目である。

関連するものの内容「自立心」は、身近な環境に主体的に関わり、いろいろな活動や遊びを生み出す中で、自分の力で行うために考えて、自分でしなければならないことを自覚して行い、諦めずにやり遂げる。「協同性」は、友だちと互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的を実現するために考えたり、工夫したりすることで、充実感をもってやり遂げるようになる。「道徳性・規範意識の芽生え」は、してよいことや悪いことが分かり、相手の立場に立って行動するようになり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、決まりを守る必要性が分かり、決まりを作ったり守ったりするようになる。「社会生活と関わり」は、社会生活との関わりが示す視点について、家族を大切にしようとする気持ちを持ち、地域の人々と関わることで、自分が役に立つことの喜びを感じて、地域に親しみを持つようになる。「10の姿」に含む領域内容は、いずれの領域よりも領

域「人間関係」が多いことが明らかなため、領域「人間関係」では、10の姿についても丁寧に触れていく必要があると説明することができる。

人と直接関わっていく力をつけること、よい関係をつくるためにルールを守るなど、対人関係の基本を幼児期に育てていくことが大切な領域であると言える。小学校との接続を視野に入れた「10の姿」が記載されたことにより、領域「人間関係」の学ぶ視点の中には、従来から重要視されている、「領域が発達の視点」として捉え、子どもの発達という視点から遊びや生活を見る授業展開が必要であろう。

4. 「領域に関する専門的事項」について

これまでの幼児教育の教職課程では、小学校で学ぶ「教科に関する科目」から、「領域に関する専門的事項」に変更されたことで5つの領域を専門知識として学ぶことができるようになった。つまりは、新たな幼稚園教諭養成課程はどのような学問を提供するかを示し、どのような授業の展開をしていくかと考えることが必然的になる。

一般社団法人保育教諭養成課程研究会は、文部科学省の委託を受け、2017（平成29）年3月に幼稚園教諭養成のためのモデルカリキュラムを発刊した。これまで立ち上がっていた「教科に関する科目」に替わって新設された「領域に関する専門的事項」のシラバス作成上の留意事項や科目の考え方、授業担当者に求められる専門性等を（表2）示した。「領域に関する専門的事項」は、養成課程の学生自身が各領域のねらいや内容に応じて保育実践するための基盤となる知識や技能の獲得を目指す科目群であると理解できる。

（表2） 領域に関する専門的事項

（1）「領域に関する専門的事項」の考え方

○領域について、領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする。幼稚園教育において、「何をどのように指導するのか」という視点で見たときの「何を」を深める部分である。幼稚園教育要領に示されているねらい及び内容を含めながら、これらに限定されることなく、より幅広く、より深い内容が求められる。

○各大学等で、「イ 領域に関する専門的事項」の科目を構成する場合、科目名は、必ずしも「幼児と〇〇」とするものではない。モデルカリキュラムにおいて「幼児と〇〇」とした理由は、本科目は各領域の背景にある専門的な視点からの領域の考え方を深めることを目指していて、その分野は多岐にわたることが予想されるが、必ず「幼児」「幼児期」「幼児期の教育」の視点を忘れないでということの意味するものである。

（2）各大学等におけるシラバスを作成する際の留意事項

○領域の内容にかかわる授業担当者の専門を生かしつつ、モデルカリキュラムの一般目標や到達目標を踏まえ、当該領域に關しての専門的な知識・技能等を習得できるよう、工夫していく。

○授業モデルを参考にして、主体的・対話的で深い学びとなる過程を保障する授業を構想していく。

（3）授業担当者に求められること

○各領域に關連する学問分野を専門とする者が担当することになるが、いずれの場合も、「幼児」や「幼児期の教育」、「幼稚園教育」について、よく理解していることは重要である。

○「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」の各領域の担当者と連携をとる必要がある。「領域に関する専門的事項」に関する科目と、「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」に關する科目のどちらを先に教えるかによって、扱う内容が変わってくることを予想される。

※平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究—幼稚園教諭の資質能力の観点から養成課程の質保証を考える—（文部科学省幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託「幼稚園 教諭の養成の在り方に関する調査研究」）より抜粋。

次に（表3）は、「領域『人間関係』に関する専門的事項」で扱うモデルカリキュラムである。この内容は、幼児教育課程で学ぶ学生が学修した際、十分理解して実践に繋げられるようにするために必要最低限の内容が示されている。ここには授業の「全体目標」と「現代的課題から幼児と人間関係を見る」と「発達から人間関係を見る」3つの目標が提示されており、到達目標を達成することで一般目標が、一般目標を達成することで全体目標の着実な学びの達成が目指せるよう関係付けて構成されている（一般社団法人保育教諭養成課程研究会2017）。これらの目標を理解した上で、目標達成に係る内容をシラバスに反映するよう求められている。

領域「人間関係」の授業モデルや、保育内容「人間関係」の研究動向を調べた永野（2007）や、「人間関係」を学ぶ内容の多くは、子どもの発達を教授する必要があると述べる小林（2020）においても、多く取り扱われていた内容は「幼児の発達」に関する内容であることに注目したい。領域「人間関係」に関する研究は主として、子どもの人間関係の変容や発達に関することが多いと見てとれることから、「領域に関する専門的事項」として、「幼児の発達」に関する内容を教授することが大きな比重を占めていると考えられよう。「幼児の発達」に関する内容の多くは、「10の姿」との関連が指摘できることが、（表1）（表2）（表3）を概観することでも納得ができる。「10の姿」とは、小学校の学びとの関連をもつ重要なキーワードであることから「領域に関する専門的事項」は、幼児期から児童期の教育に繋げてみることを射程としていることが見て取れる。

先述した通り、「教科に関する科目」が廃止され、小学校教育に関する学修が減少することを鑑みると、「領域に関する専門的事項」において、授業時に小学校教育を視野に入れた教授が求められていると言える。

（表3） 領域「人間関係」に関する専門的事項のモデルカリキュラムと授業モデル

全体目標	当該科目では、領域「人間関係」の指導の基盤となる、幼児の人と関わる力の育ちに関する専門的事項についての知識を身に付ける。	
A 幼児と人間関係における現代的課題		
一般目標	幼児を取り巻く人間関係をめぐる現代的課題を理解する。	
到達目標	A-1	幼児を取り巻く人間関係の現代的特徴とその社会的背景を理解している。
	A-2	人と関わる力の育ちがその後続く一人一人の人生を支える力となることを理解している。
B 幼児期の発達と領域「人間関係」		
一般目標	幼児期の人間関係の発達について、幼稚園生活における関係発達論の視点から理解する。	
到達目標	B-1	乳児期に育つ人と関わる力の発達について、身近な大人との関から説明できる。
	B-2	幼児期の遊びや生活の中で育つ人と関わる力の発達について、教師との関係、幼児との関係、集団の中での育ちを観点として説明できる。
	B-3	自立心の育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる。
	B-4	協同性の育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる。
	B-5	道徳性・規範意識の芽生えについて、発達の姿と合わせて説明できる。
	B-6	家族や地域との関わりと育ちについて、発達の姿と合わせて説明できる。
■考えられる<授業モデル> (※括弧内の記号は、上記の到達目標の内、特に関連の深いものを示す)		
授業モデル	(1)	講義の初めの段階で、親子やきょうだい関係、地域における子供同士の関わり等、幼児を取り巻く人間関係について、1950 年頃からの年代毎に異なる特徴的な事例を挙げながら、現代的特徴と課題を考える機会を設け、講義の内容に関心をもたせる。(A-1)
	(2)	幼稚園教育において育みたい資質能力を領域「人間関係」の観点から考察し、大学生活で求められる人と関わる力との関連について話し合う。(A-2)
	(3)	幼児の様々な発達の諸側面が人との関わりの中で育つことについて、それぞれの発達の時期の特徴と関連づけて理解できるように、具体的な事例を基に説明する。(B-1-6)
	(4)	幼稚園生活における決まりにはどのようなものがあるか等について、具体例を挙げ、それぞれの決まりが幼児にとってどのような意味をもつか考え話し合う機会を設ける。(B-5)
	(5)	人間関係領域の専門性に関わる最新の知見に基づき、集団の中で見られる具体的な幼児の姿や幼児同士の関係の発達を理解できるように説明する。(B-1-6)

「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究 一幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える一（報告書）」〈文部科学省幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」〉より抜粋

5. まとめにかえて

保育者にとっては、要領の意図を十分に理解することは重要であるが、このことは自身が目指していく保育観や子ども観を振り返ることにも繋がっていく。要領に記す幼稚園教育の基本や保育内容は、国が定めた基準であり法的拘束力をもっているが、現場で出会う子どもは、個々それぞれに個性があり、特徴がある。子どもの発達状況を的確に捉え、現実に応じた保育が展開できるようになることが望まれる。

領域「人間関係」をふまえ、領域に関する専門的事項「人間関係」で中心的に扱う内容を、以下2点に整理した。1点目は、遊びを通した人間関係の育ちに関する基礎的理解である。近年の幼児教育は、「遊びを通しての総合的な指導」を特に強調して言われているように、幼稚園で行われる遊びや生活を捉える重要性を、授業で盛り込むことが必要となる。特に遊びを通して、就学以降の学習に基礎となる資質能力を身につけていくことを「10の姿」からもしっかりと捉えることを伝える。河邊（2020）は、幼児期の遊びを通して、「対人葛藤」「問題解決能力」など領域「人間関係」に関する発達についての関連性を整理している。遊びを通して、子どもたちは、友だちや保育者とのかわり方を知り、感情を制御することを学んでいくことを伝えたい。

2点目は、子どもの発達の基礎的理解である。友だちや保育者とのコミュニケーションを考える際、認知発達や身体発達、社会性など心理学的な視点からの基礎的理解が不可欠となる。とりわけ、領域「人間関係」では、養育者とのアタッチメント形成から保育者との信頼関係についてを、伝える内容が重視されている。このように心理学の基礎的知識を、幼児教育の実践的な内容と関連づけて理解できるよう授業内容を組み立てることが必要となる。

「人間は社会的動物である」は、古代ギリシャの哲学者アリストテレスの言葉である。社会の中で生まれ育ち、自分ひとりで生きている人は誰もいず、親がいるから自分が生まれている。友達がいるから楽しい園生活を過ごすことができる。人間関係を捉える上で、社会の仕組みを理解せず考えることはまず出来ない。これは、社会がなければ自分が存在しないことを意味する。

子どもは、この世に誕生した後、親に対しての愛着形成を経て人間関係の基盤を作る。基盤の上に人間関係を構築していくのである。乳幼児期に家庭中で子育てを受けた子どもは、幼稚園や保育所、認定こども園といった、家庭から離れた場所で過ごすことは、初めて社会に出ることを意味する。それまでの環境の中で「保護者と子ども」という二者の関係しか経験のない子どもは、当然、戸惑いや不安を感じつつも、保育者という新たな信頼対象を得て、他児と交流しつつ新たな人間関係を形成していく。子どもの社会性の発達は、愛着の側面から伝えることを大事にしたい。

J.Bowlby（1969）によれば、愛着（attachment：アタッチメント）とは、「人間が特定の個体に対して持つ情緒的な絆」である、という。また、J.Bowlbyは、愛着は「揺りかごから墓場まで」という言葉も残し、愛着は生涯持続するものと捉えている。成長とともに、愛着の行動レベルから対人認知としての表象レベルへと変化し、この拠り所はやがて、自尊感情であったり自己肯定感を育み、社会性の発達が促されることに加えて、他者との関係づくりの基礎となるのだ。

「領域『人間関係』に関する専門的事項」では、子ども時代からの人と人との関わり的重要性に気づき、養成課程の学生自身が領域「人間関係」のねらいや内容等を保育者の専門的知識として理解し、保育実践するための基盤を学べる様に展開したい。また、全体目標や内容から、「領域『人

間関係』に関する専門的事項」では大別して2つの専門的事項に関する知識を身に付けることが求められていることが示されている。

「領域」は発達を見る窓として捉えるのであれば、実際に保育の場で出会う、子どもの姿や発達の姿には個々それぞれの特徴があることを、現場経験者や、子どもの発達を教授する教員が担当し、子どもと人間関係における現代的課題点を捉えた上で、学生らが、卒業後に保育者となった際に、今の現実に即した保育が展開できるようになることが望まれる。

参考・引用文献

- 民秋言編（2016）「幼稚園教育要領・保育所保育指針の変遷と幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立」（第2版） 萌文書林
- 文部省（1948）「保育要領－幼児教育の手びき－」
- 文部省（1956）「幼稚園教育要領」
- 文部省（1964）「幼稚園教育要領」
- 文部省（1989）「幼稚園教育要領」
- 文部省（1998）「幼稚園教育要領」
- 文部科学省（2008）「幼稚園教育要領」
- 文部科学省（2017）「幼稚園教育要領」
- 河邊貴子「遊びの中で学ぶということ」（2020）（岩立京子・河邊貴子・中野圭祐「遊びの中で試行錯誤する子どもと保育者」明石書店 pp.7-12）
- Bowlby, J. (1969/1982) *Attachment and Loss*. Vol. 1. *Attachment*. London: The Hogarth Press. (ボウルビィ, J.黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子・黒田聖一（訳）（1976/1991）.母子関係の理論 I 愛着行動（新版）岩崎学術出版社）
- 文部科学省（2016）中央教育審議会教育課程部会幼児教育部会 配付資料幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の再整理イメージ
- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/04/19/1369745_05.pdf（閲覧日2021年5月20日）
- 神長美津子（2017）教職課程認定基準の改正の概要 無藤隆代表 保育教諭養成課程研究会編 幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデルカリキュラムに基づく提案～ 萌文書林
- 文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説
- 無藤隆（2017）今後の幼児教育とは 無藤隆編著 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿 東洋館出版社
- 中川智之・橋本勇人・入江慶太・尾崎公彦・笹川卓也・大江由美・三宅美智子・重松幸治・橋本彩子・岡正寛子・種村晁也（2018）幼稚園教諭養成課程における「領域に関する専門的事項」に求められる授業内容に関する一考察－保育内容領域「人間関係」及び「環境」のモデルカリキュラムを手がかりとして－ 川崎医療短期大学紀要, 38, 63-69
- 永野泉（2007）「人間関係」に関する動向：日本保育学会の研究発表を中心に 淑徳短期大学研究紀要46巻, 33-42

小林真（2020）乳幼児の人間関係の発達 富山大学人間発達科学部紀要15巻1号. 157-166